

北海道社会福祉協議会

北海道中国帰国者支援・交流センター 〒060-0002 札幌市中央区北2条西7丁目一番地かでの2・7

電話 011-252-3411 FAX011-252-3412 URL: <http://www.hokkaido-sien-center.jp/> E-mail: hokkaidocenter@dosityakyo.or.jp

料理交流会

スイーツづくりで新たな体験



10月30日、料理交流会を開催し、帰国者と支援者、計29名が「火を使わない簡単スイーツづくり」を体験しました。今回は、「キウイとマンゴの豆花」と「フルーツ生春巻き」の2品を作りました。講師を置かず、調理の手順を動画で確認しながら、グループごとに調理を進めました。



豆花は、豆乳で作るプリンに似たお菓子で、中国で生まれ、台湾を中心に親しまれています。はちみつで和えたキウイとマンゴをトッピングしました。

フルーツ生春巻きは、ライスペーパーにフルーツやクリーム、シリアルなど、好みの具材を包んで食べる新しいスイーツです。ライスペーパーはもともとベトナム料理に使われる食材ですが、扱いやすく手に入りやすいため、最近ではインターネット上でも、さまざまなアレンジ料理が掲載されています。フルーツの春巻きは、帰国者のみなさんにとって、初めての体験だったと思いますが、「おいしい」と好評で、みなさん笑顔で味わっていました。具材の組み合わせによって食感や味が変わる点も、楽しんでもらえたようです。

いずれの料理も作り方はとても簡単で、好みに合わせたアレンジが可能です。豆乳の味にあまり慣れていない樺太帰国者からは、「自宅では牛乳で作ってみたい」といった声も聞かれました。今回の交流会が、家庭でも楽しんで作りするきっかけとなれば幸いです。



帰国者理解を深めるために



10月22日、北海道と共催で中国残留邦人等支援に係る研修会を開催しました。厚生労働省中国残留邦人等支援室の係長を招き、道内の8つの市の担当者が集まって、帰国者支援の現状と課題について情報交換等を行いました。

戦争を乗り越え、つながれた命

「家族を求めて～中国残留孤児「間瀬珠美」の人生から～」

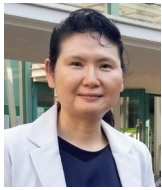
研修会の中で中国残留邦人等の体験と労苦を伝える戦後世代の語り部の講話も行われ、長久保まりさんが、残留孤児である自身の母親の生涯について語りました。

間瀬珠美さんは、1945年ソ連侵攻により混乱を極める満州で、布団にくるまれ、置き去りにされていたところを中国人の夫婦によって引き取られ、育てられました。13歳のときに養父が亡くなり、貧しさの中で養母とさき合う日々が始まります。17歳になったある日、間瀬さんは養父の弟から自分が日本人であることを知らされました。また、その8年後、養母が間瀬さんの同僚に対し、間瀬さんが日本人であることを打ち明けます。養母が「娘には言わないで」と言ったその事実を、同僚は間瀬さんに告げますが、間瀬さん自身は体の弱った養母を思うと確かめることはできず、その後も周囲には一切明かさずに生きてきました。1991年、日本で肉親を探したいという、長年胸に秘めていた願いとともに訪日調査に参加します。しかし、肉親だと名乗る人は現れませんでした。間瀬さんは失意のうちに中国に戻りますが、1993年、日本への永住帰国を決断します。時間をかけて捜せば肉親が見つかるかもし

れないという期待を抱いての決断でした。しかし、82歳の現在に至るまで肉親は見つかっていません。「家族を見つけられなかったことが自分の人生で一番残念なこと」と間瀬さんは言います。長久保さんは母親の生涯を知り、三人の女性について考えるようになったと言います。ずっとひとりで思い悩んでいた母、母を実の娘のように育て、日本人の子であることを最後まで明かさなかった養母、そして、おそらくは、子どもを生かすために究極の選択をせざるを得なかった母の実母。それぞれが置かれた状況とその思いを想像したとき、自分の命がこの三人の女性によってつながれたことが実感できたと言います。

様々な事件や出来事、そのときの社会情勢、そして人々の思いがひとりの人の人生にどのような影響を及ぼすのか、また、自分自身の命はどのようなつながれてきたのか、そのことを考えてみずにはいられない講話でした。

～中国残留邦人等の体験と労苦を伝える戦後世代の語り部長久保まりさんに聞きました～



■ 帰国後の苦勞

1993年に家族とともに帰国した長久保さん。すでに20歳を過ぎており、日本語は働きながら徐々に身につけていくほかありませんでした。語り部の研修中も日本語力不足を痛感し、常に日本語コンプレックスを抱えていると言います。一方で日本社会や文化への適応は順調で、もともと日本に親しみと憧れを抱いていたこともあり、文化的な違いそのものを苦勞と思うことはなかったそうです。

■ 語り部になったきっかけ

そんな長久保さんが語り部になろうと思ったきっかけは、中国残留邦人が国を相手に裁判を起した際、ボランティア通訳として聞き取り調査に参加し、人生体験を聞いたことでした。「語り部研修」について知ったとき、孤児の方々を思い起こし、その体験を自分が語り継ぎたいと思ったそうです。研修中に助言を受け、最終的に自身の母親について語ることを決心しました。

数十年にわたるお母さんの人生の体験と労苦を、45分という時間の中にまとめることはかなりの難題でした。試行錯誤を重ね、原稿が形になるまで約1年の時間を要しました。原稿作成のための聞き取りの過程は、お母さんが長い間語らずにきた記憶や感情を共有するときとなりました。またお母さんの体験が個人的なものであると同時に、戦後の歴史や社会と深く結びついていることを強く感じたと言います。

■ 活動の中で感じること

語り部として、帰国者や一般の人、また様々な世代に講話をしてきましたが、聴く人のそれまでの人生経験や関連する知識の有無によって、受け止め方には違いがあると言います

「帰国者の方々は、ご自身やご家族の体験と重ね合わせながら聞いてくださることが多く、うなずきや沈黙を通して、深く受け止めてくださっていることが伝わってきます。言葉にされなくても、思いや記憶が共有されていると感じることも少なくありません。一方、一般の方々は、特に学校などで初めてこの

歴史に触れる方々からは、『初めて知った』『考えるきっかけになった』といった感想が多く寄せられます。驚きや戸惑いとともに、新たな視点として受け止めてくださっている印象を受けます。また、年配の方々は、ご自身の記憶や身近な体験と結びつけて聞かれることが多く、若い世代は、これからの社会や自分たちの生き方と重ねて考えようとする姿勢が見られます。それぞれの世代が、自分なりの立場や視点で語りを受け止めていると感じています」。

実際に長久保さんの講話からは、聴衆と思いを共有しようとする姿勢が伺えます。原稿をまったく見ず、歩きながら、聴衆ひとりひとりの顔を見ながら語るのです。そのようなスタイルはどのようにして生まれたのでしょうか。

「語り部活動を重ねる中で、原稿を見るよりも、聴衆の表情やその場の空気を感じながら語る方が、自分の思いがより伝わると感じるようになりました。また、母の人生体験を語る際、突然強い悲しみに襲われることがあります。そのようなときには、姿勢を少し変えたり、歩きながら語ったりすることで、非常にづらい感情をある程度コントロールできることに気づきました。現在は、そのような工夫をしながら語りを続けています」。

■ 語ることの意味と責任

最後に長久保さんが考える語り部活動の意義と、活動を通じて得たものについて伺いました。

「『残留孤児』という歴史を学ぶことで初めて、自分のルーツでもある母の人生と向き合うことができました。また母と同じような運命を生きた多くの人々がいたことを知り、そのような、自分自身の背景でもある歴史を語る時、寄せられた感想を通して、聴く人がやはり正面から向き合い、受け止めようとしてくれたことがわかります。語るこの意味と責任の重さを実感しています」。

戦争体験者が少なくなっていく今、残留孤児2世として担うべき役割をわずかでも果たしていければ、と語る長久保さん。その講話は、私たちが生きる社会とその歴史、自分自身の生き方についても考えるきっかけを与えてくれます。

ハローワーク見学会

就職活動への理解を深める



12月12日、ハローワーク見学会を実施し、帰国者3名が参加しました。当日は「ハローワークプラザ札幌」を見学し、職員の方からハローワークの利用方法について説明を受けました。また実際に求人検索端末機を操作し、求人検索を体験しました。外国人のための相談窓口が設けられていることや、自宅のパソコンやスマートフォンからも求人検索ができることを知り、参加者にとって有意義な機会となりました。

参加者からは、「外国人は実際にどのような仕事に就いているのか」「求人が多くなる時期はいつか」といった質問が出されました。これに対し、職種は日本語のレベルによって幅があること、また、求人が多くなるのは4月頃であるとの説明がありました。今回の見学会を通して、就職活動に対する理解を深めることができました。



稚内・地域生活支援推進事業

お互いの交流を大切に

1月9日、稚内日口友好会館にて、恒例の新年交流会が開催されました。この交流会は、稚内経済交流協会と当センターの共催により行われ、稚内市および宗谷総合振興局の職員、NPO法人日本サハリン協会の理事をはじめとする支援者と、樺太帰国者のみなさん、あわせて22名が参加しました。

ロシアでは1月7日にクリスマスが祝われるため、1月上旬もお祝いムードが続きます。そうしたロシアの習慣にあやかり、当日は和やかな雰囲気の中で、参加者同士の交流を深めることができました。また、動画やスライドショーの上映も行われ、これまでの交流の様子を振り返る機会となりました。今後も交流を大切にしたい取り組みを継続していきたいと思います。

2月・3月の予定

2月2日	健康運動
2月9日	健康運動
2月10日	茶道体験
2月15日	介護予防運動 (もみじ台)
2月16日	健康運動 (ふまねっと)
2月17日	介護予防運動 (手稲前田)

3月2日	健康運動
3月7日	中国・樺太帰国者 を知る集い
3月9日	健康運動
3月15日	介護予防運動 (もみじ台)
3月16日	健康運動 (ふまねっと)
3月17日	介護予防運動 (手稲前田)
3月18日～春休み	(4月6日 まで)

編集後記

「戦後世代の語り部」長久保まりさんは、まるで磁石のように、自然に人を引き寄せる不思議な魅力に溢れた方で、今号では紙面をお多く割かせていただきました。長久保さんのご協力に心から感謝します。